

生活準拠型の生活発表会の意味

—幼稚園 4 歳児クラスの発表会「大きなかぶ」の事例的検討—

教職開発コース 松 原 未 季

The Meaning of performance day rooted in daily life at kindergarten:
Case Study of a 4-Year-Old Children's Class Play Based on "The Giant Turnip"

Miki MATSUBARA

This study aims to investigate children's efforts at creating performance day rooted in life at kindergarten. 4-year-old toddlers were observed. The homeroom teachers and the director were interviewed about performance day. Results indicated that the teacher chose a topic that the children were interested in as the theme of the presentation. The teacher let the children decide the lines and dances. In the play, the teacher included the activities that the children longed for and the play and activity that they had been involved in. Thanks to the teacher's support, the children were able to work on their presentation independently. From this research, it was found that the process leading up to the performance and the independence of children are important in presentations.

目 次

- 1 問題と目的
- 2 方法
 - A 調査協力者
 - B 調査方法
 - 1 フィールド観察
 - 2 担任保育者と園長へのインタビュー
 - C 倫理的配慮
- 3 結果と考察
 - A 生活準拠型の生活発表会「大きなかぶ」の形成プロセス
 - 1 テーマ設定
 - 2 役割設定
 - 3 台詞やダンス決め
 - 4 登場の在り方
 - 5 「大きなかぶ」のストーリーに子どもたちの憧れや取り組んできた遊びや活動を取り入れる
 - a クラスの園児の憧れの活動を取り入れる
 - b クラスの園児が取り組んできた遊びや活動を取り入れる
 - 6 特別な支援を必要とする園児への配慮
 - a 役割を与える
 - b ルーティンの実行
 - B 4 歳児クラスの発表会「大きなかぶ」からみる生活準拠型の生活発表会の意味

4 総合的考察

引用文献

謝辞

付記

1 問題と目的

本研究は、幼稚園 4 歳児クラスの生活準拠型の生活発表会「大きなかぶ」の形成プロセスを、練習から本番までのフィールド観察と保育者へのインタビューによって分析し、子どもにとって、生活準拠型の生活発表会の意味とは何かということを明らかにすることを目的とする。

生活発表会は、園の行事の一つとして、幼稚園、保育園、こども園において行われており、1 年間の日常の保育の集大成を、演劇などを通して保護者に発表する場であり、年度末に実施されることが多い（若尾、2022）。相浦・大元（1989）の調査によると、9 割以上の園で生活発表会が行われており、6 割以上の園において生活発表会は最も重要な行事であると捉えられている。

これまでの幼児の生活発表会に関する先行研究は、主に、生活発表会の形成過程における幼児の協同性の育ちという観点から分析が行われている。

例えば、中野（2022）は、5 歳児の劇ごっこに焦点

を当てて、音楽表現が協同的な学びに通じる過程とそれに対する保育者の援助について考察している。その結果、5歳児が他児と音楽表現を楽しみながら、感情や意味を共有し、共通の目的を見出したり、協力したりする姿や、劇ごっこを進めるうえで、台詞の決定や舞台やお面の作成をめぐる、幼児同士で話し合ったりする姿が見られた。保育者が、幼児の実態に合わせた遊びのテーマや楽器等の提示、幼児同士をつなぐ言葉かけ、経験を自覚できるような援助を試みることによって、5歳児が音楽表現を楽しみながら共通の目的を見出し、協力工夫する姿が見られ、協同的な学びを経験することに通じた。

利根川 (2016) は、幼稚園 5 歳児クラスの「エルマーのぼうけん」の観察を行って、9 名のチームによる協同的な活動としての劇づくりを分析し、劇づくりの過程を描き出し、「対話」という視点から検討を行った。その結果、子どもたちは題材となる物語の「書かれていない部分」について演ずることで気付く互いのイメージの齟齬を出し合うことを契機に、対話をし始め、互いの動きや意見をすり合わせつつ、具体的な表現を発見していくということが示された。それに加えて、子どもたちは、「自分たちは何を表現したいのか」ということを話し合って明確化し、結果的に「本物らしさの探求」をチームとして目指し、共有しながら進んでいるということが明らかとされた。

しかしながら、生活発表会は、最終的には保護者に向けて発表を目指すものであるため、保育者自身がプレッシャーを感じて、子どもに生活発表会に関する取り組みに参加させたり、プレッシャーをかけたりしてしまうことが指摘されている (八木・喜多村, 1982)。金子他 (2016) によると、生活発表会は、保護者に向けて発表されるものであるため、劇作品としての完成度が迫られて、保育者中心の指導となるケースも存在すると報告している。大豆生田 (2021) は、日本の保育が行事を中心に年間の保育を組み立てていて「行事中心保育」となっており、そのために子どもも保育者も行事のために「しなければならないこと」に 1 年中の保育が終わり、それを「こなしていく」ことが日常の保育となっており、このような保育スタイルは子ども主体の保育を重んずる保育が保証できなくなると指摘している。さらに、宮里 (2022) は、コロナ禍で従来の園行事が小規模化したり、人数制限したりするといった新たな方法で行われるようになったことを契機に、コロナが収束しても、当日に向けて、子どもが主体的に行事を楽しむ新たな行事のスタイルを模索す

る必要があると論じている。

若尾 (2022) は、幼稚園教諭 3 名にインタビュー調査を行い、保育者は、幼児が生活発表会の形成プロセスにおいて、子どもが発表会に主体的に取り組むためにどのような意図で指導や環境構成を行っているのかということについて分析を行っている。この調査の結果、一つには、保育者は、生活発表会の導入段階においては、人形劇鑑賞によって生活発表会への興味関心を高める、劇遊びが行える環境を用意する、絵本を並べておくといった工夫を行うことによって、子どもが自ずから生活発表会に関心を向けられるような援助が為されていたということが明らかとなった。二つには、子どもに楽しんできた遊びや、好きなこと、やりたいことを挙げてもらうことによって、生活発表会に向けての導入が行われていることも示された。三つには、劇遊びの形成過程で子ども同士が話し合い、クラスの園児全員で作りあげる機会や設計図を作成する経験、人前で発表する経験など、子ども同士が繋がるような多様な経験が提供されていることが示された。これらの保育者の援助によって、子どもたちは、発表会のプロセスに主体的に参与したり、他児を認めたり、自分の気持ちを表したりして力が発揮されるということが示された。

若尾 (2022) の研究においては、子どもが主体的に生活発表会に取り組むために必要な保育者の援助について詳細に検討がなされているが、保育者へのインタビューから生活発表会の形成プロセスにおける保育者の意図と保育者が捉えた子どもの姿を記述したものであるため、このような保育者の指導が子どもの姿にどのように通じているのかということが捉えにくい。

そこで、本研究では、子どもの主体性を重視して「生活準拠型」の形態で発表を行っている園で生活発表会の練習から本番までの形成過程をフィールド観察と保育者へのインタビューをもとに行うことによって、生活準拠型の発表会の意味を明らかにすることを目的とする。なお、この園で行われていた発表会は、発表のテーマの題材 (絵本など) を忠実に再現するのではなく、その題材の中に、クラスの子どもの 1 年間の遊びや活動を取り入れたり、保育者主導ではなく、子どもたちから積極的に意見を取り入れたりして、ボトムアップ形式で発表会を作りあげるという特徴があったため、筆者が「生活準拠型」の発表会と定義づけた。

具体的には、幼稚園 4 歳児クラスの生活準拠型の形式で行われた生活発表会「大きなかぶ」の形成過程を

丹念に追うことによって、生活準拠型の発表会の形成プロセスや、生活準拠型の発表会の意味について検討を行いたい。

2 方法

A 調査協力者

関西圏の公立幼稚園の4歳児クラス（2年保育）A組に在籍する園児20名（男児9名、女児11名）、及び、担任保育者1名（新任保育者）、加配の保育者1名を調査協力者とした。

B 調査方法

1 フィールド観察

201X年5月から201X+1年3月まで計38回フィールド観察を行った。フィールド調査時には、主に幼児の遊びにおける協同性の発達に着眼して観察を行っていた。本研究は、幼児の遊びにおける協同性の発達を観察する一端として行った。主に、自由遊び時間からお弁当時間終了までの午前の保育場面を、生活発表会の練習を中心に観察を行った。生活発表会の練習については4回、本番1回を参観した。記録は、幼児と保育者の発話と行動の筆記及びビデオカメラによる映像記録によって採取した。

2 担任保育者と園長へのインタビュー

担任保育者には、各学期末に、学期ごとの目標の立て方やクラスや園児の姿や成長についてインタビューを行った。3学期末のインタビューにおいては、各学期の目標の立て方やクラスや園児の姿や成長に加えて、生活発表会の練習と本番についても質問した。具体的には、①生活発表会の練習において、園児にどのような援助を意識されていましたか、②「大きなかぶ」の発表会のねらいはどのようなものでしたか、③発表会の練習に参加することが難しい園児や特別な支援が必要な園児には、練習でどのような援助をされていましたか、④生活発表会の本番のクラスや園児の姿はどのように感じられましたかということについて質問した。

園長にも、調査終了後、生活発表会に関する印象的な事例やエピソードを筆者と共有しながら、4歳児A組「大きなかぶ」の発表会や、生活準拠型の発表会の意味についてインタビューを実施した。具体的には、①4歳児A組「大きなかぶ」は園長先生から見られてどのように感じられましたか、②生活準拠型の発表会は、子どもにとってどのような意味や学びがあると思いますか、③生活発表会の練習や本番では、園長先生

として担任の先生をどのようにフォローされていましたか、④生活発表会では、保護者にどのように対応されていましたかということについて質問を行った。それに加えて、調査協力園の保育方針や園長として新任保育者をいかにフォローしていたのかということについても質問した。

C 倫理的配慮

本研究の遂行にあたり、事前に調査協力園に調査目的を説明し、調査実施への許可を得た。なお、個人情報保護のため、園名、クラス名、調査年度は伏せ、本論文中的関係者の氏名は全て仮名とする。

3 結果と考察

A 生活準拠型の生活発表会「大きなかぶ」の形成プロセス

1 テーマ設定

4歳児A組の調査年度の生活発表会は、「大きなかぶ」であった。生活発表会のテーマが「大きなかぶ」となったのは、以下の園長の語りのように、A組の園児が2学期末に、B保育専門学校の「大きなかぶ」のお話遊びを参観し、関心を持った園児が多かったことが契機となった。

園長先生の談話 1

12月にA組の子どもたちがB保育専門学校の「大きなかぶ」を見て、それに使われていた曲を帰りに嬉しそうに歌っていた。担任も新任だったから（生活発表会のテーマを何にしようか）悩んでいたけれど、私と「これ（「大きなかぶ」）いいんじゃないか」と話して、「大きなかぶ」になった。

また、「大きなかぶ」は、登場人物が順番に出てきて、かぶを引っ張るという単純な動きを繰り返すストーリーであったため、保育者は、幼稚園で初めて生活発表会を経験する2年保育の4歳児に定着しやすい題材であると捉えていた（園長先生の談話2）

園長先生の談話 2

「大きなかぶ」は2年保育の4歳児さんの発達にも合った題材だったように思う。5歳児さんだともう少しストーリーや台詞も複雑になるけれど、2年保育の4歳児さんには「大きなかぶ」のように、単純な動きを繰り返すというストーリーのほうが子どもに定着しやすいと思います。

2 役割設定

保育者は、「大きなかぶ」の役割も、絵本通りには設定せずに、子どもたちにどのような役割が必要なのかを聞いて決定させた（担任保育者の談話 1）。絵本の「大きなかぶ」の登場人物は「おじいさん・おばあさん・まご・いぬ・ねこ・ねずみ」であるが、子どもたちが様々な動物の動きを練習し、最終的に「おじいさん・子ども・ライオン・うさぎ・とり」となった。この時期、A組では動物になりきるごっこ遊びが、子どもたちの間で流行していたことや、この年度の大きなクラスの保育目標が「色々な形で表現できるようになること」であったため、保育者は子どもたちにとって、何かの動物になりきる経験は重要であると捉えており、子どもたちがなりたいものを演じられることを尊重していた。

担任保育者の談話 1

（生活発表会の役決めは）「役何する？」って聞いたりしてて、「おじいさん、おばあさん、まご」で、（クラスの園児は）うさぎとか好きなので、動物も好きなので、もうあの子たちの中で、（絵本を読んで）「おじいさん、おばあさん、まご」までは当たり前みたいな感じやったみたいで、で、「動物どうする？」っていう話をしたときに、「ライオンがいい」とか「ウサギがいい」とか猫もやったし、鳥もやって、後なんやったかな、馬とかワニとかもなんか色々やったんですけど、でも、結局分かりやすいのがいいよね」っていう表現の面で、「馬とか犬やったら何が何か分かりにくいよねー」って話にもなったりもして、ライオンとウサギと鳥と、それはもう子どもたちが選んでやったので、その 6 役に分かれてグループごとに変えながらやっていったんですけど、「じゃあそろそろ役を決めよう」っていう時になってやっと、「まごって何？」ってなって、「まごってなんだろう？」って子どもがいいやって、「僕ら子どもやし、子どもでいいんちゃう」ってなって、「おじいさん、子ども、ライオン、ウサギ、鳥」になりました。

また、子どもたちがなりたい役についても、子どもたち自身に自ら決定させていた。子どもたちが最もなりたい役が演じられるように、結果的におじいさん役 3 名、子ども役 6 名、ライオン役 5 名、うさぎ役 2 名、鳥役 4 名と役割によって人数に偏りが出てしまっても、全員が第一候補の役割を演じられるようにした。このように、あえて人数制限を設けずに、各々の子

どもが最もやりたい役を演じられることは、子どもの生活発表会への練習や本番に向けての意欲を高めたと考えられる。

担任保育者の談話 2

（各々の役割の）人数バラバラなのも、子どもたちもこれがいいって言ったので、したので、「子ども（役）」が多かったりとか、うさぎも、カスミちゃんとメグミちゃんだけで他にいなかった。カオルちゃんがおじいさん役をやったのは、株をひっぱりたかったから。（中略）張り切ってやってたんで、みんなでできたんで良かったなって思います。

3 台詞やダンス決め

各々の役割の台詞やダンスについても、子どもたちに役割ごとに集まって決定させていた。例えば、保育者は、事例 1 のように、台詞やダンスを決める際に、子どもに尋ねて、メモをし、子どもたちが考えた台詞から台本を作成していた。保育者は、「（台詞も）子どもに「なんて言う？」って聞いてメモして、それで決めてましたね。踊りとかも自分たちで決めてやったらいいんちゃうかなって思って、はい、なかなか話し合いもできる子たちだったので、なので、もう子どもたちに任せました」と語っており、子どもたちが台詞やダンスを積極的に決定して発表会作りが進んでいった。

事例 1

（保育者とおじいさん役のカオル・ウミカ・エツキがかぶの前で、おじいさん役の台詞を考えている）

保育者：（かぶの前に立って）子ども役のお友達に「何て言ったらいいと思う？」

ウミカ：おーきなかぶができたんだっ。

保育者：（ウミカに向かって）「『おーきなかぶができたんだっ』、いいなー、次何て言ったらいい？」

エツキ：（保育者に向かって）一緒に抜こうっ！

ウミカ：（保育者に向かって）一緒にかぶを抜こう？

保育者：（エツキ・ウミカに向かって）「両方いいなー、そしたら『おーきなかぶができたんだっ！一緒に抜こう』はどう？」

エツキ・ウミカ：（保育者に向かって）嬉しそうに頷く。

保育者：（エツキ・ウミカに向かって）かしこいなー、じゃあ先生エツキ君とウミカちゃんが考えたのメモしとくな（と言って台詞をメモする）

以下に生活発表会の本番でのおじいさん役と子ども役が登場する場面を示す。保育者は、ピアノで「大き

なかぶ」を演奏したり、おじいさん役と子ども役の園児が台詞を発する前にピアノで合図を示したりするにとどまり、おじいさん役と子ども役の園児が自ら考えた台詞とダンスを披露し、子どもたちが前面に出てストーリーが進んでいった

事例 2

(おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカが舞台の左側前方のかぶの近くに出てきて並ぶ)

カオル・エツキ・ウミカ：大きなかぶができたなあ。よし抜こう (と大きな声で揃えていって、手を叩く)
 保育者：(「大きなかぶ」の音楽をピアノで演奏する)
 カオル・エツキ・ウミカ：(保育者の演奏に合わせて) おじいさんがまーいたかぶーのたねからーおおきなかぶができてましたー。(と大きな声で歌う)

カオル・エツキ・ウミカ：(歌い終わると舞台の右側の客席の近くに行つて) かぶーを引っ張るおじいさん！ (と言って、ダンスをする)

カオル・エツキ・ウミカ：(客席の前からかぶの前に移動して、カオル・エツキ・ウミカの順に並んで、連なって、保育者のピアノ演奏に合わせてかぶを引っ張って) よーいしよ、よいしよ、よーいしよ、おおきなかぶが抜けません！ (と言って、三人で床に倒れる)

カオル・エツキ・ウミカ：(首をかしげるポーズをとりながら) どうしよう、抜けないなー、(手を鳴らして) そうだ、こどもを呼ぼう。(と言って、後方に座っている子ども役の園児に) 子どもさんきてー！

リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：(立ち上がって、保育者の演奏に合わせて、中央でスキップをした後、舞台の右側前方に並んで、おじいさん役に向かう)

保育者：(ピアノで合図をする)

リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：(おじいさん役に向かって) どうしたの？ (とみんなで声を揃えて尋ねる)

カオル・エツキ・ウミカ：おきなかぶができたんだっ！ かぶを抜くのを手伝って！ (と大きな声で、子ども役に頼む)

リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：いいーよっ！ 一緒にかぶを抜こう。

保育者：(「大きなかぶ」の音楽をピアノで演奏する)
 カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・

トモキ・ハジメ・ヒビキ：(保育者の演奏に合わせて) おじいさんがまーいたかぶーのたねからーおおきなかぶができてましたー。(と大きな声で歌う)
 カオル・エツキ・ウミカ：(歌い終わると舞台の右側の客席の近くに行つて) かぶーを引っ張るおじいさん！ (と言って、その場でポーズを決めて、カオル・エツキ・ウミカの順に並んで連なって、かぶを引っ張る準備をする)

リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：(客席の前方に出てきて) 株を引っ張る子どもっ！ 子どもっ！ (と言ってお客さんの方を見てダンスをした後、おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカにつらなってかぶを引っ張る準備をする)

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：(おじいさん役と子ども役が連なったのを確認して、保育者の演奏に合わせて) よーいしよ、よいしよ、よーいしよ、おおきなかぶが抜けません！ (と言って、9人で床に倒れて笑い合う)

子どもたちは自分たちで考えた台詞やダンスを披露しているためか、決められて覚えたダンスや台詞を見せるという雰囲気ではなく、保育者の援助があまりなくても、スムーズに台詞やダンスを披露し、その役割になりきって発表していた。

4 登場の在り方

担任保育者の談話3のように、保育者は、子どもたちが自分の役割が登場してかぶを引っ張る前に舞台右側の客席の近くに寄って、「びよんびよんびよんうーさぎさんー、びよんびよんびよんうーさぎさん、はねるよ、はねるよ、ランラララン」と歌いながら、同じ役割のメンバー同士で考えたダンスを披露する場面を設けていた。

担任保育者の談話 3

その部分(それぞれの役割の子どもが前に出てきて踊る場面)は、発表会なんで、「うちの子だけいっぱい出てくる」とか「うちの子はでてない」とかそういう部分もあるので、そこはもう見せ方で考えました。

これより、各々の子どもが、前に出てきてダンスするシーンを作り、子どもたち全員にスポットライトが当たる場面が設けられることによって、特定の子どもが「主人公」として協調されず、子どもたち全員が「主人公」となることができた。

5 「大きなかぶ」のストーリーに子どもたちの憧れや取り組んできた遊びや活動を取り入れる

A組の「大きなかぶ」の発表会は、絵本の「大きなかぶ」を忠実に発表するのではなく、「大きなかぶ」のストーリーにA組の子どもたちが1年間取り組んできた遊びや取り組みを乗せるという形式で行われた。劇の流れは以下の通りであった。

1. 始まりの歌（『1. 2. 3 でおはよう』）をクラスの園児全員で歌う→2. クラスの園児全員で歌を歌いながら株の種を客席前の花畑に植える→3. 「おじいさん役」が登場し、客席の前方でダンスをした後、かぶの位置に移動し、かぶを引っ張る→4. かぶが抜けないため、「おじいさん役」が「子ども役」を呼ぶ→5. 「子ども役」が登場し、客席の前方でダンスをした後、「おじいさん役」の後ろにつながり、一緒にかぶを引っ張る→6. かぶが抜けないため、「子ども役」が「ライオン役」を呼ぶ→7. 「ライオン役」が登場し、客席の前方でダンスをする→8. クラスの園児全員でパラバルーンを披露する→9. クラスの園児全員でパラバルーンを片付ける→10. 「ライオン役」が「おじいさん役」と「子ども役」の後ろにつながって、一緒にかぶを引っ張る→11. かぶが抜けないため、「ライオン役」が「うさぎ役」を呼ぶ→12. 「うさぎ役」が登場し、客席の前方でダンスをする→13. クラスの園児全員でフラフープを並べて、二つのグループに分かれて、一人ずつフラフープを飛ぶという遊びをする→14. クラスの園児全員でフラフープを片付けて、各自元の位置に戻る→15. 「うさぎ役」が「おじいさん役」・「子ども役」・「ライオン役」の後ろにつながって、一緒にかぶを引っ張る→16. かぶが抜けないため、「うさぎ役」が「鳥役」を呼ぶ→「鳥役」が登場し、客席の前方でダンスをした後、「おじいさん役」・「子ども役」・「ライオン役」・「うさぎ役」の後ろにつながって、クラスの園児全員でかぶを引っ張り、かぶが抜ける→クラスの園児全員で「終わりの歌 『おひさまになりたい』」を歌う→保護者から生活発表会の感想を聞く

a クラスの園児の憧れの活動を取り入れる

A組の「大きなかぶ」の発表会のストーリーの中には、事例3のように、クラスの園児が憧れていたパラバルーンが取り入れられていた。保育者の話によると、A組の園児は、10月の運動会で年長児クラス（5歳児）がパラバルーンを披露しているのを見て、感動

し、憧れを感じたようであった。パラバルーンは、「大きなかぶ」のストーリーとは関連はないが、クラスの園児が憧れていた活動であったため、「子ども役」が「ライオン役」を呼び、「ライオン役」がダンスをした後、クラスの園児でパラバルーンを披露する場面を設けた。生活発表会の練習が始まった3学期は、子どもたちが「早く年長児さんになりたい、お兄ちゃん、お姉ちゃんになりたい」と進級への意欲や期待が高まっている時期でもあったため、年長児が運動会で行った活動が「大きなかぶ」に組み込まれたことは、子どもたちの生活発表会への意欲を高めることに通じたと考えられる。

生活発表会の本番でも、子どもたちは、パラバルーンを披露する場面では、表情豊かに取り組んでおり、客席からは拍手が起こり、発表会の見せ場の一つとなる場面となった。

事例3

（ライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントがおじいさん役の園児と子ども役の園児に呼ばれて、舞台の中央でライオンのポーズをしてみんなで回った後、子ども役に向き合う形で一列に並ぶ）

保育者：（ライオン役の園児に向けて、ピアノで台詞の合図を送る）

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：（ライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって）どーしたの？（と大きく声を合わせて言う）

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：（ライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって）おーきなかぶができたんだっ！かぶを抜くのを手伝ってっ！（と大きな声で声を合わせて言う）

ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：（おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカとライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって）いいーよ！元気になるようにバルーンをしよう！

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：（ライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって）いいーよっ。

クラスの園児・保育者：（全員でバルーンを広げて、音楽に合わせて、バルーンを広げたり、高くあげた

り、バルーンを回すのを披露する)

クラスの園児：(バルーンが終わると、バルーンを片付ける。おじいさん役・子ども役・ライオン役の子どもたちは、舞台の元の位置に戻る)

保育者：(ライオン役の子どもたちにピアノで合図をする)

ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：いいーよっ！一緒にかぶを抜こう（と言うが、全員の声が揃わずバラバラになってしまう）

保育者：(ライオン役の子どもたちに向かって、ピアノで再度合図をしながら、優しい声で) どーぞ。

ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：いいーよっ！一緒にかぶを抜こう（と全員で声を合わせて、再度大きな声で言う）

保育者：(「大きなかぶ」の音楽をピアノで演奏する)

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ・ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：(保育者の演奏に合わせて) おじいさんがまーいたかぶーのたねからーおおきなかぶができましたー。(と大きな声で歌う)

カオル・エツキ・ウミカ：(歌い終わると) かぶーを引っ張るおじいさん！（と言って、その場でポーズを決めて、カオル・エツキ・ウミカの順に並んで連なって、かぶを引っ張る準備をする）

リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ：株を引っ張る子どもっ！子どもっ！（と言って、その場でポーズを決めて、おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカにつらなってかぶを引っ張る準備をする）

ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：(舞台右側前方の客席の近くに寄って) かぶをひっぱるライオンっ！ライオンっ！（と言って、ダンスをして、おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカ・子ども役のリン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキにつらなってかぶを引っ張る準備をする）

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ・ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：(おじいさん役と子ども役が連なったのを確認して、保育者の演奏に合わせて) よーいしよ、よいしよ、よいしよ、おおきなかぶが抜けません！（と言って、14人で床に倒れて笑い合う）

保育者は、前述のように、クラスの園児が憧れているパラバルーンを発表会に取り入れようと考えていた

が、どのシーンでパラバルーンを取り入れるのかということについても子どもたちと話し合って決めていた。以下の保育者の語りのように、子どもたちとの話し合いの中で、「ライオン役の園児の台詞やダンスに元気がない」という意見が出たため、ライオン役が登場する場面の半ばで、パラバルーンを設定し、ライオン役が意欲を持って発表会に参加できるような工夫が行われていた。

担任保育者の談話 4

バルーンは、10月の運動会で年長組さんのお兄ちゃん、お姉ちゃんがやっているのをみて、子どもたちがそれから憧れてやってみたいって言っていました。あ、バルーンはもともとは（生活発表会に組み込むことは）何もなく進んでいったんですけど、ライオンが元気ないやんっていうところから、もともとこっちとしてもバルーンとかはいいなとかは思ってたんですけど、まだそこまでどういう風にいれるかまでは考えてなくて、考えてなかったんですけど、(子どもたちの)「ライオンさん元気ないやん」っていう言葉から「なんか元気出ることしようよ」って話になって、そこから子どもたちがバルーンをやりたいっていったのがきっかけでした。

以上のように、保育者は、生活発表会の中で子どもたちが憧れを持った活動を積極的に取り入れることによって子どもたちが練習や発表会に向けて意欲的になるようにしたり、発表会を作りあげる中で、保育者が先導するのではなく、子どもから意見を聞いて話し合う過程を大切にしたりしていたと考えられる。

b クラスの園児が取り組んできた遊びや活動を取り入れる

次に、保育者は、「大きなかぶ」のストーリーの中に、クラスの園児がこの1年間の4歳児クラスにおいて取り組んできた遊びや活動を取り入れるという工夫も行っていた。具体的には、事例4のように、フラフープを用いて、ケンケンパーをするという遊びと、その準備と片付けを子どもたち自身で行うという場面が設けられていた。保育者は、この場面について「(ライオン役が登場する場面で) バルーンが出てきて、で、今度うさぎさんが出てきた後も『何かしよう?』って子どもたちに聞いたら、フープをケンケンパーしたいって言ったのでやりましたね」と語っていた。クラスの園児は、10月の運動会後は、運動会の影響もあって、フラフープを用いた運動遊びで盛り上がっており、その姿を保護者に伝えるために、保育者はフラフープの

遊びの場面を組み込んだと示唆される。また、保育者がフラフープの遊びだけではなく、その準備や片付けの場面も保護者に見せる場面を設定したのは、保護者に子どもたちの準備や片付けなどの1年間での生活の中での育ちを伝えたいという意図も込められていたであろう。

事例 4

(うさぎ役のカスミ・メグミがおじいさん役・子ども役・ライオン役の園児に呼ばれて、舞台の中央でうさぎのポーズをしてみんなで回った後、子ども役に向き合う形で一列に並ぶ)

保育者：(うさぎ役の園児に向けて、ピアノで台詞の合図を送る)

カスミ・メグミ：(おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカとおじいさん役のリン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって) どーしたの？ (と大きく声を合わせて言う)

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ・ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：(うさぎ役のカスミ・メグミに向かって) おきなかぶができたんだっ！かぶを抜くのを手伝ってっ！ (と大きな声で声を合わせて言う)

カスミ・メグミ：(おじいさん役のカオル・エツキ・ウミカとおじいさん役のリン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキライオン役のユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケントに向かって) いいーよ！元気が出るように一緒に遊ぼう！

カオル・エツキ・ウミカ・リン・チサト・ミノリ・トモキ・ハジメ・ヒビキ・ユキノリ・ヒデアキ・サキホ・マナミ・ケント：(うさぎ役のカスミ・メグミに向かって) いいーよっ。

クラスの園児・保育者：(クラスの園児は二つのグループに分かれて、フラフープとマットを自分たちで運んでフラフープの遊びができる準備をする。準備ができると、二つのグループで一人ずつフラフープでケンケンパーをする姿を保護者に見せる)

クラスの園児：(フラフープの遊びが終わると、フラフープとマットを片付ける。おじいさん役・子ども役・ライオン役・うさぎ役の子どもたちは、舞台の元の位置に戻る)

り、保育者はこれらの2名の子どもが、生活発表会の練習や本番で集中できるような工夫を試みていた。

a 役割を与える

保育者は、一つには、発表会の練習に参加することが難しかったカオルには役割を与えることによって、練習に集中して参加できるように援助した。カオルは、入園時から見通しがない場面や普段とは異なる場面においては、不安が高まりやすい園児であった。4歳児の初めには、自由遊びから全体活動になり、保育室の雰囲気が変わったことを察知すると、保育室前のテラスのインコの籠の前に座って、気持ちを落ち着かせる姿がよく見られた。

2学期以降は、保育者は、カオルが全体活動への参加を渋った場合には、カオルの不安を丁寧に聞き取ることによって、カオルの全体活動への参加をためらう姿は少なくなった。

3学期に入って、生活発表会の練習が始まると、カオルは練習への参加を渋って不安を感じているようであった。だが、事例5のように保育者は、カオルが練習には参加していなくても、クラスの園児で作成したかぶには関心を示していることを読み取った。そのため、保育者は、おじいさん役を希望する他の園児にも許可を取って、「おじいさん役」の先頭でかぶを直接引っ張る役を担わせた。カオルは、「おじいさん役」の先頭の役割が決まると、それまで参加しなかった練習に参加して、おじいさん役の台詞を言うようになり、本番でも堂々と発表することができた。

事例 5

カオルは生活発表会の練習が始まり、保育室の雰囲気が変わると、落ち着かない様子で保育室の隅に立ち尽くし、練習に参加しない。だが、「大きなかぶ」に使われるかぶ(段ボールで作られたもの)には関心を示し、ずっと触るようになる。保育者は役割決め(おじいさん・子ども・ライオン・ウサギ・鳥)でカオルに何をやりたいのかを尋ねると、カオルはかぶに一番近い「おじいさん」を希望する。「おじいさん」はカオルの他にエツキ・ウミカがいた。保育者は、カオル・エツキ・ウミカに「だれが1番前で(株を)引っ張る？」と尋ねると、三人とも挙手する。カオルはしきりにかぶを触っており、かぶを引っ張る役がやりたいようであったため、エツキとウミカに「カオルちゃんに株引っ張るのやってもらってもいい？」と尋ねると、エツキとウミカは頷く。

6 特別な支援を必要とする園児への配慮

A組には、特別な支援を必要とする子どもが2名お

カオルは、1番先頭でかぶを引っ張ることができると決まると、かぶの傍にずっといれるため、嬉しそうにかぶを触る。それまでは、練習に参加しなかったが、かぶを引っ張る役が決まると、おじいさんの台詞を言って練習に参加するようになった。

担任の保育者の談話5で、保育者が語っているように、エツキやウミカも、本当はかぶを引っ張りたいたいという意思はあったようだが、カオルが先頭でかぶを引っ張る役割にならないと練習をしないため、保育者はエツキやウミカに先頭を譲ってもらった。かぶを先頭で引っ張る役割をめぐって、カオルとエツキやウミカが大きく対立しなかったのは、エツキやウミカがこの1年間の関わりの中で、カオルが全体活動や行事などの普段の自由遊び場面とは異なる場面で混乱しやすいという性質を理解していたためであり、カオルだけではなく、周囲の園児の他児の理解への育ちも見られた。

担任保育者の談話 5

カオルちゃんがおじいさん役をやったのはかぶを引っ張りたかった、そうなんです。おじいさんも最初はみんな株を引っ張りたいで、カオルちゃんが前来たりとかウミカちゃんが前来たりとかエツキ君が前来たりとかクルクル回って、子どもらでやってやったんですけど、結局カオルちゃんが2番目、3番目になるとやらないってなって、エツキ君とウミカちゃんが譲る形になりました。エツキ君とウミカちゃんも本当はかぶを1番前で引っ張りたけれど、子どもなりに、カオルちゃんが全体活動とか行事の場面で大変になりやすいって察して、助けようとしてくれたのだと思います。

b ルーティンの実行

また、保育者は、特別な支援を必要とし、生活発表会の当日の本番の時間が迫る状況の中で混乱してしまったケントには、登園した時に日常的に行っているルーティンを、発表会当日にも行うことによって、ケントの気持ちを落ち着かせて、発表会に参加できるようにした（事例6）。ケントは、入園当初から見通しがつかない場面では、パニックに陥って、保育室を出て行ってしまふこともあった。だが、担任保育者や加配の保育者と信頼関係を築き、全体活動にも徐々に参加できるようになったり、絵を描いたり転がし遊びをしたりするなど好きな遊びを見つけるようになった。また、ケントは1学期からメグミと親しくなり、登園

すると、メグミのスモックのリングのアップリケを見せてもらって、スケッチをするということが習慣となっていた。生活発表会の本番の日には、「土曜日なのに何故幼稚園に行くのか」が分からず、混乱した様子であった。だが、担任保育者がケントと電話で話し、日々行っているように登園してメグミにアップリケを見せてもらい、加配の保育者とスケッチをすることで、ケントは気持ちを落ち着かせて、発表会本番に参加することができた。

事例 6

ケントは、生活発表会の当日になると、休日なのに何故幼稚園に行かなければならないのかが分からず混乱する。ケントの保護者から電話が入り、「ケントが『今日は土曜日だから、幼稚園はお休みだから行かない』と言っているんです」と相談を受ける。保育者は、ケントに電話に代わってもらい、「ケンちゃん、先生と一緒にダンスしよー」と誘うと、ケントは担任保育者の声を聞いて安心したのか、登園する。

登園すると、加配の保育者がメグミと一緒にケントに近づき、いつものようにメグミちゃんにアップリケを見せてもらい、絵を一緒に描く。

クラスの園児が生活発表会の会場に入った後、加配の保育者におんぶされてライオン役の位置に立って参加する。

B 4歳児クラスの発表会「大きなかぶ」からみる生活準拠型の生活発表会の意味

前節では、生活準拠型の発表会「大きなかぶ」の形成プロセスについて考察を行った。本節では、園長と担任保育者の語りから、「大きなかぶ」からみる生活準拠型の生活発表会の意味について考察したい。園長と担任保育者の語りからは、生活準拠型の発表会では、保育者が保護者に完成度の高い作品やストーリーを忠実に再現されることを目指しておらず、テーマとなるストーリーに乗せて生活発表会に至るまでの子どもの興味・関心・日々の積み重ねの中で生まれた「過程」も重視していることが明らかとなった。生活準拠型の生活発表会は、大きな枠組みは保育者が作るが、子どもが「主人公」であるため、発表会を作りあげる過程で子どもの意見を取り入れたり、子どもにも気付かせたりすることが重要であり、それが発表会の練習や本番に向けての子どもの意欲に通じると考えられる。

園長先生の談話 4

生活発表会は、「生活発表会」なので、クラスの生活の中で、積み重ねたものを発表するものだと思う。お話を通して、子どもが学んだものを見ていく。最終的には、保護者に見てもらふことになるけれど、子どもの興味・関心・日々の積み重ねの中で生まれた「過程」が大切。例えば、今回の「大きなかぶ」だったら、「先生と一緒にかぶになろう」って言って、みんなでかぶの真似をしたりね。でも、先生がテーマや音楽など大枠で、「こうします」っていうのは決めるけれど、3 歳児、4 歳児、5 歳児といふけれど、小さい子ほど（保育者が）提案する。でも、「やりましょう」ではなく、子どもが主人公なので、主役は子どもなので、なりきるのが得意な子どもに振ったり、「ここってどう？」「どう動いたらいい？」っていうのを、子どもに気づかせて作り上げていくことが大事。普段とは変わらないけれど、大人にも見てもらふと嬉しい。

担任保育者の談話 6

生活発表会は、「子どもありきの活動」というのが大切だと思う。生活発表会というのは、これまでの遊びの積み重ねや育ちを見せる場です。劇をメインで見せるというよりも、子どもたちの遊びの積み重ねや育ちを劇に乗せて見せるというのが自然だと思います。

子どもたちが生き生きしているのが 1 番大切だと思います。

4 総合的考察

本研究では、生活準拠型の生活発表会「大きなかぶ」の形成プロセスを追うことによって、一つには、保育者はテーマ設定の段階から、子どもが、関心があるものや子どもの発達に応じたものを選択し、子どもが発表会に意欲的に取り組めるようにしていた。二つには、役割設定においても、絵本の実際の登場人物にとらわれず、子どもたちに必要な役割を考えさせ、人数制限を設けずに、各々の子どもが 1 番やりたい役を演じられるようにして、平等性・対等性・主体性が重視されていた。三つには、台詞やダンス決めにおいても、保育者は絵本を忠実に再現したり、保育者が考えた台詞を提案したりするのではなく、子どもに演じたいシーンを具現化するためには、どのような台詞やダン

スが必要なのかを常に問いかける姿勢が見られた。その結果、子どもたちは、絵本や保育者から提案された台詞やダンスを覚えて実行するというのではなく、自ら考えた台詞やダンスを登場人物になりきって演じることができたと考えられる。四つには、登場の在り方については、子どもが役割ごとに客席前でダンスするシーンが設定されており、子どもたち全員が「主人公」となるような工夫も見られた。五つには、「大きなかぶ」のストーリーに子どもたちの憧れや取り組んできた遊びや活動を取り入れることによって、子どもたちが発表会のプロセスに主体的に関われたり、保護者にも入園してからの 1 年間の育ちを見せたりすることができた。六つには、行事など全員が集まる場面では、気になる子や特別な支援を必要とする子どもが集中できず、目立ってしまう場合もあるが、特別な支援を必要とする子どもが練習や本番で集中できない場面では、その子どもの集中が持続するような役割を与えたり、日頃から園で行っているルーティンを行ったりして、練習や本番にも参加できるようにしていた。

これより、生活準拠型の発表会は、保護者に完成度の高い作品を見せることや、テーマとなる絵本を忠実に再現することが目指されず、ストーリーに園で日常的に取り組んでいるものを取り入れられており、生活発表会に至るまでの子どもたちの興味・関心・日々の積み重ねの中で生まれた「過程」が重視されていた。また、子どもがテーマ、台詞、ダンス、発表会に組み込みたい活動など様々な場面で、子ども自身が決定し、子ども自身が「主役」となって、主体的に発表会を作りあげる姿が見られた。このような生活発表会が行われている背景には、「子どもの主体性や創造力をいかに支えていくのか、育んでいくのかということを大切にしたい」という協力園の保育方針も影響していたと考えられる。担任保育者は新任保育者であったが、日常の保育から子どもの目線に立って保育をすることを重視していたことも影響したであろう。さらに、園長は発表会をするにあたって「担任には、発表会では子どもの関心・興味に沿ったものを行ったり、過程を重視するように助言していた」と語っており、新任保育者を丁寧に支えていたり、特別な支援を必要とする子どもの発表会への取り組みについては加配の保育者や園長、副園長のサポートもあったことから、担任保育者は周回的なサポートも受けながら、子どもの主体性を重んじて発表会を行うことができたと思われる。

生活発表会とは、保護者に発表することが前提とさ

れているため、保育者がプレッシャーを感じやすく、完成度が重視されて、指導的になりやすいが、本研究での生活準拠型の発表会における子どもの主体性を重んじた保育者の援助や、その援助のもとで初めての生活発表会に主体的に取り組む4歳児クラスの子どもの姿から、改めて、「誰のための発表会なのか」ということを問い直したり、幼児教育の基本である主体性を重んじた発表会に取り組んだりすることが重要であると考えられる。

今後の課題としては、一つには、本研究では、生活準拠型の発表会の形成プロセスや保育者の援助、子どもの取り組み、生活準拠型の生活発表会の意味については検討できたが、生活準拠型の生活発表会という独自の発表会をする上での難しさや課題については検討できなかったため、幼稚園での新たなフィールド調査や保育者へのインタビューをもとに明らかにしたい。

二つには、生活準拠型や劇型などの様々な形態の生活発表会のフィールド調査や保育者へのインタビュー調査を行うことによって、子どもにとっての生活発表会の意味や学びについて探求することである。

三つには、幼稚園3, 4, 5歳児の生活発表会のフィールド調査や保育者へのインタビュー調査によって、年齢別の生活発表会の特徴を比較し、発達に応じた幼児の生活発表会の意味や学びについても検討を行いたい。

引用文献

- 相浦雅子・大元千種 1989. 「保育における行事に関する調査(1): 生活発表会について」『日本保育学会大会研究論文集』第42号, pp.350-351.
- 金子智栄子・櫻井ひとみ・金子智昭・金子功一 2016. 「幼児の自由な遊びを尊重した劇遊びの実践的研究: 大ホールにおける発表会に向けての保育者の指導経過と子どもの変容」『文京学院大学人間学部研究紀要』第17号, pp.49-62.
- 宮里暁美 2022. 『Pot 2022年9月号』チャイルド本社, pp.14-15.
- 中野圭祐 2022. 「幼児の遊びにおける音楽表現が協同的な学びにつながる過程とその援助: 5歳児の劇ごっこでの姿に着目して」『乳幼児教育・保育者養成研究』第2号, pp.131-144.
- 大豆生田啓友 2021. 「園行事を「子ども主体」に変える! : 11カ園のリアルな実践記録」チャイルド本社.
- 利根川彰博 2016. 「協同的な活動としての『劇づくり』における対話: 幼稚園5歳児クラスの劇『エルマーのぼうけん』の事例的検討」『保育学研究』第54巻, 第2号, pp.49-60.
- 若尾良徳 2017. 「幼稚園における生活発表会の形成プロセスにみられる指導の実践」『日本体育大学紀要』第47巻, 第1号, pp.23-34.
- 八木紘一郎・喜多村純子 1982. 「劇遊びの条件(1): 4歳児の実践

活動とそのVTRの分析及び考察(実践研究報告. 人文・社会科学篇)『白梅学園短期大学紀要』第18号, pp.45-66.

謝辞

本研究の公表にあたり、調査に協力してくださった幼稚園の先生方、並びに4歳児クラスの子どもたちに心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費助成事業(26・4886)及び(21J01129)の助成を受けた。

(受入教員 浅井幸子教授)